

新課程の趣旨を踏まえ 自校に必要な重点項目を定める

2011年度に新課程は全面実施となった。ベネッセ教育研究開発センターが実施した

「新教育課程に関する調査」の結果で、新課程1年目を振り返りながら、全国連合小学校長会会長を務めた経験もある東京福祉大の池田芳和教授と、東京都豊島区立さくら小学校の関口純一校長に、2年目に大切なポイントを整理してもらった。

●新課程1年目を振り返って

**教科書の厚さに気を取られず
子どもの理解度に目を向ける**

——新課程の全面実施1年目が終わりました。授業時数や指導内容の増加によってさまざまな影響が出ると予想されていましたが、学校現場で何か変化は感じられましたか。

関口 新課程はそれまでの指導を見直し、より良い指導にするチャンスです。「学校全体で変わるんだ」という方向に教師の意識を高めていくことが大事であり、校長として注力してきました。本校は2009年度の先行実施前から新課程に関する校内研究を進め、先生方が新課程の趣旨を十分に理解して授業を

行えるよう準備を進めてきました。そうした成果もあり、先生方一人ひとりに心構えがあったはずですが、新課程に対する戸惑いなどは見られませんでした。

池田 先行実施前の08年度には、全国連合小学校長会と文部科学省の連名で「新学習指導要領の先行実施に向けた準備チェックリスト」を文部科学省のウェブサイトに掲載しました。「平成21年度から算数、理科で追加される指導内容を理解している」「平成21年度の指導計画を見直した」といった項目であり、これらが出来ていれば新課程にしっかり対応できたはずですが、実際に授業を進めてみるとうまくいかない部分も出てきたと思います。

「新教育課程に関する調査」概要

- ◎調査テーマ：新教育課程全面実施初年度(2011年度)の1学期における小学校の取り組みと教員の学習指導の実態と意識
- ◎調査方法：郵送法による質問紙調査
- ◎調査時期：2011年6～7月
- ◎調査対象：全国の公立小学校の校長および教員。校長245人(配布数1,000通、回収率24.5%)、教員868人(配布数6,000通、回収率14.5%)

出典の調査データは、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます

<http://benesse.jp/berd/>>「調査・研究データ」

*本調査では同時に学校の授業に対する保護者の意識も調査しているが、今号では校長・教員調査の結果を抜粋

——ベネッセ教育研究開発センターが11年6～7月に実施した「新教育課程に関する調査」では、年間指導計画よりも「遅れている」という回答が国語で目立ち、学年では5年生で「遅れている」と回答した教科が多くありました(図1、2)。これについてどう捉えられますか。

関口 本校での指導の状況から考えると、指導内容が増えたため、計画より遅れる部分が出ていたのかもしれませんが、先生方には、どうしても教科書を全て教えなくてはという意識が強くある中、新課程になって教科書が厚くなったため、時間が足りません。「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」という意識の転換が必要なのですが、なかなか

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

東京福祉大教育学部
池田芳和 教授

いけだ・よしかず◎東京都の公立小学校教諭、東京都教育庁指導部初等教育指導課長、東京都の公立小学校長などを経て、現職。全国連合小学校長会長、中央教育審議会初等中等教育部会臨時委員なども歴任。主な著書に『特別支援教育 改訂指導要録記入の実際と文例集』（共編著／明治図書出版）がある。



東京都豊島区立さくら小学校
関口純一 校長

せきぐち・じゅんいち◎東京都の公立小学校教諭、東京都教育庁指導主事などを経て、現職。豊島区立さくら小学校◎児童数は344人。目指す子ども像に「豊かな『かわり』の中で凛として輝くさくらの子」を掲げて教育活動を推進する。

か難しい側面もあります。

池田 先生方は真面目ですから、教科書を漏れなく教えるという意識が強いのかもしれません。また、遅れた要因は学年や教科の特性にもあると思います。例えば、5年生になると学習内容が難しくなるので、理解をしつかりさせるためには丁寧に見える必要が出てきます。更に、5年生は思春期にさしかかる時期のため、子どもと教師の信頼関係を築くことがより重要になり、生活指導に割く時間が多くなるという事情があると思います。また、国語では新課程で強調されている言語活動を重視しているために活動の時間が増え、その結果、授業が遅れがちになったのかもしれません。

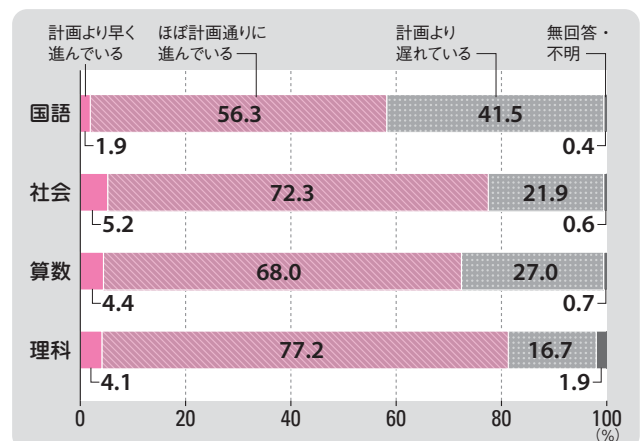
——年間指導計画の遅れへの対応としては、「全体的に授業の進度を速める」という回答がどの教科も多く見られました（P.6図3）。**池田** 調査結果では、若手教師ほど進度を速めて対応する傾向が見られました（P.6図4）。新課程では、基礎的・基本的な知識・技能の習得のために繰り返し学習が強調され、習得、活用、探究の学習による思考や理解の深まり、学習意欲の向上が求められています。本来、「この知識は身に付けているから、これを生かして次の事項に発展させよう」「この公式は理解しにくいから、時間を掛けて定着させよう」など、子どもの状況を見極めて軽重を付けた指導をするのが望ましいのです

図2 年間指導計画からの遅れ(学年別・1学期時点)

	1年生 (136)	2年生 (121)	3年生 (128)	4年生 (132)	5年生 (136)	6年生 (141)
国語	27.9	38.0	52.3	49.2	51.9	33.6
社会			14.6	10.9	36.7	26.4
算数	19.5	44.1	23.6	33.6	26.5	16.5
理科			7.5	19.8	21.3	20.0

注1) 「計画より遅れている」の%
注2) 30%以上の数値にアミカケをしている 注3) () 内はサンプル数
出典／Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

図1 年間指導計画の実施状況(全体・1学期時点)



出典／Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

*プロフィールは取材時(2012年3月)のものです

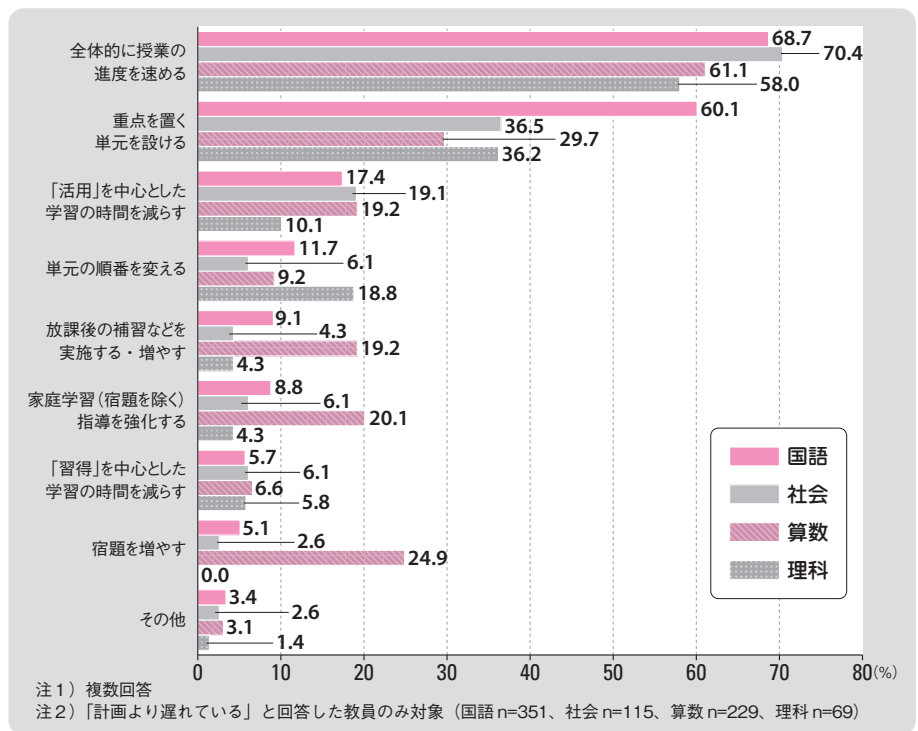
が、このような授業は指導技術や教材の深い理解などが必要なため、経験が浅い先生には難しく、進度を速めることに頼ってしまうでしょう。

関口 先生方の授業を見てみると、単元全体の授業計画は同じでも、教師によって授業のつながりが円滑な場合と、一つひとつの授業でぶつぶつ切れている場合が見られます。教えるべき内容を系統的に理解した上で、例えば、既習事項は模造紙に書いておき、授業ではそれを黒板に貼って確認すれば、板書をするよりも授業にロスが少なくてすみます。そうした工夫の積み重ねが子どもの理解にも大きく影響すると考えます。

——算数では遅れの対応として「宿題を増やす」が目立ちます(図3)。

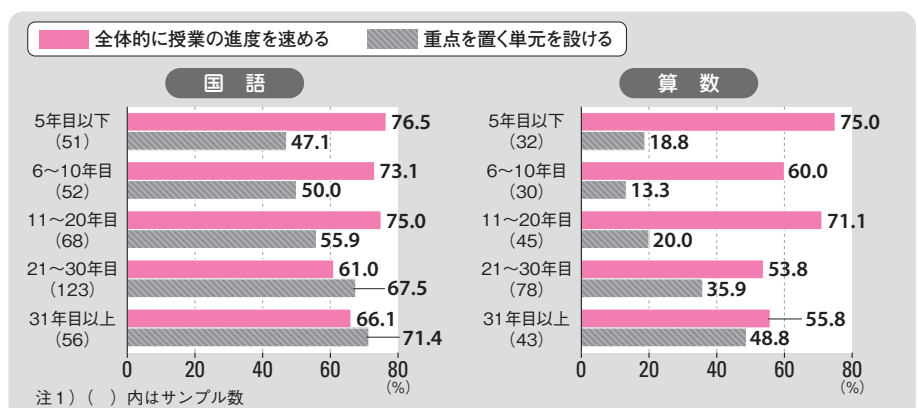
関口 算数では習熟が重要ですから、従来からよく宿題が出ていた教科です。授業だけでなく、授業で解き方を指導し、家庭でドリル学習をするという指導スタイルが新課程によって強化されたのかもしれませんが。家庭学習習慣の定着という観点からも、授業と家庭学習

図3 年間指導計画の遅れへの対応



出典 / Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

図4 年間指導計画の遅れへの対応(教職経験年数別)



出典 / Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

の連携は考えたいものです。

池田 進度が遅れているのは表面的な問題であり、そこにとらわれて授業を無理に進め、子どもの理解が十分でなくなるの方が問題です。関口先生がお話された通り、子どもの理解を深めるためには「教科書で教える」ことが重要であり、学年団や学校全体で話し合い、どこにポイントを置くのか共有すると

よいと思います。学校として足並みをそろえられるように、担任の力量による差が抑えられるでしょう。少子化の影響で単学級、小規模化となる学校が今後増えると予想されますが、校内で組織的な対応が難しい場合、地域の学校で集まって連携することも必要なのではないでしょうか。

——子どもの変化として、「児童間の学力格

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

「差」が大きくなったという回答が多い点も気になります(図5)。

池田 確かに気になる結果ではありますが、人が持つ能力には皆、違いがあり、どの時代にも子どもの学力差はあると思います。差があることばかりに目を向けるのではなく、現状から学力下位層の子どもへの手立てを考え、全力で指導することが重要です。

関口 学力下位層への対応は、本校では以前からの大きな課題です。授業が分からないまま学年が上がっていくと、授業が面白くないから参加しなくなり、学校不応を引き起こすことになりかねません。本校は、新課程全面実施を機に時間割を見直し、月1回程度の土曜授業や、毎日15分のモジュール授業を設けるなどして、毎日の授業のリズムは以前と同じようにしながらも、週1コマ分の補習時間を設けました。特に支援すべき子どもについては、保護者の了解を得て補習をする場合もあります。今まで通りの手厚い指導を続けていきたいと考えています。

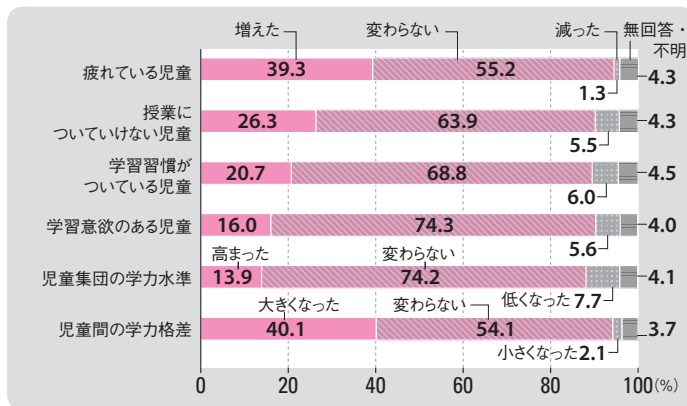
●2年目に大切なこと

**自校での1年目を振り返り
力を入れる教育活動を考える**

——新課程1年目の状況を踏まえ、2年目にはどのようなことが大切になるでしょうか。

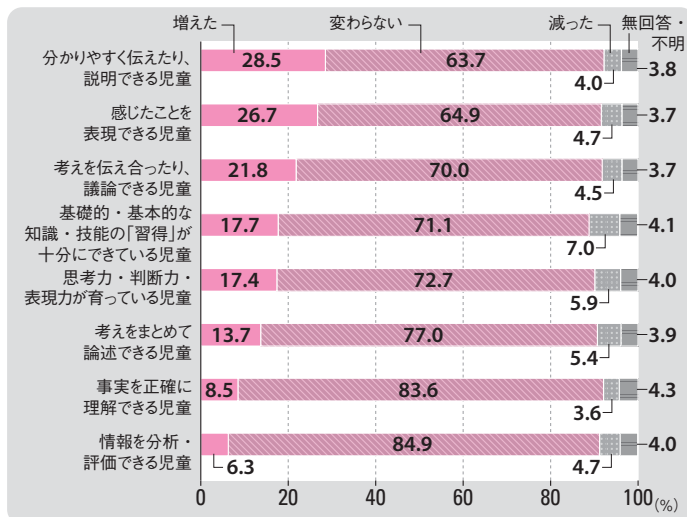
池田 確かな学力、健やかな体、豊かな心。

図5 児童の変化(疲れ、授業理解、学習意欲、学力格差など)



出典／ Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

図6 児童の変化(思考力・判断力・表現力等の育成にかかわる学習)



出典／ Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

学校は子どもの生きる力を育む場です。この根本は不変である一方、社会の変化に応じて求められる力が変わることもあります。そうした変化に応じた教育をするために、学習指導要領は改訂されるのです。現代は知識基盤社会であり、コミュニケーション能力、問題解決能力、思考力、論理力などが求められています。普遍的に求められる生きる力を意識しつつ、未来を生きる子どもに必要な力を付けるために、学校の指導も変わっていく必要があるのではないのでしょうか(図6)。魅力ある教育を行う学校は、子ども、保護者、地域から信頼されるでしょう。

関口 その通りだと思います。どの学校も十分に計画を練り、校内研究を重ねて新課程に臨み、課題を抱えつつも前進していることと思います。だからこそ、「新課程はもう走り始めた。このまま進めば安心」というのではなく、新課程の趣旨を忘れずに取り組むことが肝要だと考えます。1年目は緊張感もあり、どの先生も意識を高く持って取り組むものです。しかし、慣れてくると、そうした緊張感や意識は薄れがちです。2年目以降も1年目と同じ意識で取り組むために、校長の役目として、今一度、新課程の趣旨を意識させるよう訴えることが必要だと考えます。私は、毎



年1月の職員会議で次年度の教育課程編成の方針を出しますが、12年度は方針の1つを「新課程の趣旨を踏まえて、今まで工夫し実践してきたことを、継続し、充実させ、発展させる」としました。1年目と同じような意識でありながらも、教育活動を今以上に良いものとしていきたいからです。

池田 確かに、先生方が地に足を着けた指導をするためにも、校長がぶれない方針を出す

ことは重要です。子どもの実態、学校の状況はもちろん、地域の思いや要望も含めて、自校に求められている教育は何か。「生きる力」の育成を目標としつつ、自校の1年目の状況も踏まえ、力を入れる事項を見極め、大局的に学校の方針を考えて、打ち出す必要があると思います。

——具体的な指導面でポイントとなるのは、どのようなことでしょうか。

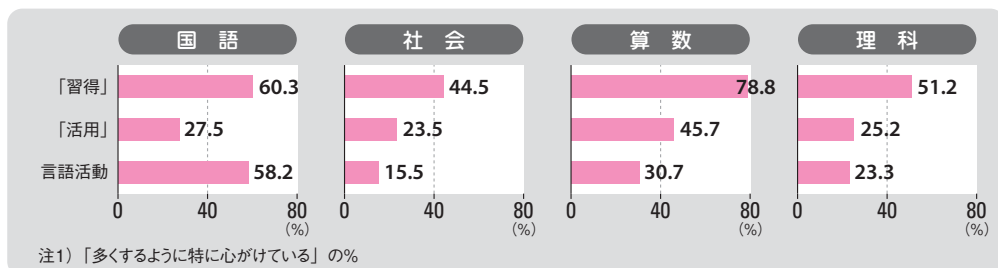
池田 新課程では「習得」「活用」「探究」の連動が強調されています。この3つの学習活動をそれぞれ指導することに先生方は慣れていますが、系統的、継続的に行うとなると、どのように授業に取り入れればよいのか難しいと感じる先生はまだいると思います。一例ですが、算数で三角形の内角の和が180度であることを活用して多角形の内角の和を考えさせる指導があります。このことから、中学生の学習内容であるn角形という一般式を意識した指導が考えられます。「習得」の観点は十分心掛けているのですから(図7)、それらを子ども思考力や活用する力を伸ばすという観点から組み立て直せばよいのではないのでしょうか。

関口 校内研究をしている学校の先生であれば「習得」「活用」「探究」の連動は意識できると思いますが、そうでなければ、そうした意識は浸透しにくいのが現状です。3つの学習活動のバランスを取るのが難しく、教科書

や指導書に即して授業を進めがちです。

池田 前回の改訂時には、生活科で体験をたくさんさせるようにしました。単に活動するにとどまり、子どもの気付きや発見などを学びに結び付けられていかなかったという反省がありました。子どもに体験して見たこと、感じたことを表現させて、気付きや考えに結び付け、更にそれらを発表させて、子ども同士の学び合いに発展させる。新課程で重視されている言語活動についても、活動を単体で終わらせずに、目的をしっかりと見据えて活動を連動させてほしいと思います。

図7 授業における「習得」「活用」、言語活動への心がけ



出典/ Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

——新課程では発達段階に応じた指導も重視されています。

池田 中教審の答申では、「生活に必要な知識は低学年までにしつかり指導すべき」ということが示されました。中・高学年で深めて発展させていく上で共通の基盤となる力や姿勢は、低学年で習得しておくことが望ましいというわけです。例えば、低学年ではたくさんの本を読み、文章に慣れ、言葉で考え、感想を表現するなどの言語活動をしており、中学年以降、相手を説得する、抽象的な問題について考えるなどの学習に発展させていくことが考えられます。

関口 先生方は目の前の子どもを見て指導していくので、自分がどの発達段階の子どもを教えているのかという視点が薄れがちです。池田先生の話がうかがい、発達段階を見通しながら、どのような力を付けるべきかを考えて指導する重要性を改めて実感しました。

池田 発達段階に応じた指導は、教科学習に限りません。係活動などにおいても、低学年のうちから役割を任せ、出来たら褒めて感謝する。例えば、小学1年生で、幼稚園時代は年長さんとして出来ていたのに、小学校では一番下の学年となったことでその役割を奪われてしまうことがあります。教師間で共通理解をし、出来ることを次の学年でも引き継ぎ、継続的に積み重ねていくことが、子どもの自立を育んでいくのです。

●校長の役割は何か

校長自らが新課程を十分に理解し方針と具体策を打ち出す

——新課程について保護者への対応はどう考えられていますか。

関口 新課程の趣旨と本校の対応について、保護者にもっと発信していきたいと考えています。既に学校だよりや保護者会で説明していますが、し過ぎることはないと思います。

池田 保護者は、学校が思う以上に学校から説明を受けたとは捉えていません。文部科学省の調査によると、学習評価に関して「学校から何らかの説明を受けている」と捉えている保護者は約57%で、学校が「保護者に何らかの説明を行っている」とした約93%と大きな差がありました。保護者と学校の意識の差は大きくあるものとして説明すべきでしょう。

——新課程2年目の学校づくりにおいて、メッセージをお願いします。

池田 子どもが明日も来たいと思う学校、保護者から信頼される学校をつくるのは、教師一人ひとりの努力の積み重ねです。多くの校長先生が実感されていると思いますが、先生方は真面目で一生懸命に子どもと向き合っています。そうした一人ひとりの頑張りや良さを認め、先生が子どもとしつかり向き合う環境を整えてほしいと思います。特に都市部では若手教師が増えており、教師の育成は校長

の役割として重要度が増しています。例えば、若手教師の学級の保護者会で校長としてあいさつをし、先生への要望や不満は校長や先生に直接言ってほしいと伝えてください。保護者が先生に不信感を抱いていると子どもが察知したら、子どもと教師の信頼関係が失われてしまいます。そうしたことを防ぐため、教師としての成長を手伝ってほしいと伝えるのです。うまくいかなかったことは隠さずに認め、校長や教頭が支援する。そうしたことが学校への信頼を高め、先生方も自信を持って子どもと向き合えるのではないのでしょうか。

関口 私は、校長自らが新課程を十分に勉強し、方針や具体策を出すことが重要と考えます。校長の言うことが毎回違うようでは、先生方はどう動けばよいのか分からず、校長を信頼できなくなり、ひいては学校全体が停滞してしまうからです。どのような子どもを育てたいか、こういう子どもに育ててほしいという「ぶれない願い」を、常に先生、保護者、子どもたちに発信していきたいと思えます。

池田 教師主導から子ども主体の授業への転換は、1970年代中頃から言われ続けてきたことで、この数年でやっと浸透してきました。指導の質的転換は時間が掛かるものであり、新課程はまだ2年目です。一度に全てを変えられるわけではありません。新課程で強調された点をしつかり踏まえ、地道に工夫と改善を積み重ねていってほしいと思います。